

# 事業完了報告書（実行団体）

事業名:	孤立させない！子どもが選択できる居場所
資金分配団体名:	一般社団法人 SHINKa
実行団体名:	一般社団法人 OMUTA BRIDGE
実施時期:	2021年 7月～ 2022年 2月
事業対象地域:	福岡県
事業対象者:	経済困窮など家庭内に課題を抱える子ども等の支援

Version 3.2

日付: 2022年3月10日

## I. 事業概要

事業実施概要	<p>本団体の組織を構成するメンバーは、教育、福祉、医療、商業等、幅広い領域の第一線で活躍しているメンバーで構成されており、職業としてもそれぞれの立場で子ども支援に関わっている。我々は特定の家庭的環境課題や不登校等の課題を抱えた子ども達はもちろんのこと、課題が表面化していない子ども達との繋がりも強化し、対象を限定しない働きかけを行った。</p> <p>大人に向けた活動：啓発イベントの開催（自閉症啓発デー、映画の上映、シンポジウム）、研修と対話のプラットフォーム事業の開催（1回/2月）、教育福祉行政連携による子ども支援ツール作成事業</p> <p>子どもに向けた活動：オンライン・オフライン ワークショップ（1回/2月）、寺子屋（2回/週）、P R e I S（1回/月）、教育機関と連携した子どもまちづくり会社（仮）2021年度事業。</p>
--------	--

## II. 課題・事業設計の振り返り

課題設定、事業設計に関する振り返り	<p>本事業で申請している寺子屋およびP R e I Sは、関わるスタッフの確保、養成に取り組みながら実施。学校や支援機関との連携を通して参加者と丁寧に繋がりを構築して運営を行った。</p> <p>○オンライン寺子屋 オンライン寺子屋活動は週に2回、同じ時間になじみのスタッフがオンライン上に滞在し、子ども達の価値観に寄り添った対話の場をつくることで、子ども達にとって「安心して立ち寄ることができる居場所」づくりに取り組んでいる。本事業では大牟田市内の全ての中学生を対象としているが、この年代の抱える課題は多様であるが、一例として次のような課題が挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夜は家庭で一人で過ごすことが多く孤独感を感じている</li> <li>・社会との繋がりに不安が強い</li> <li>・勉強したいとは思いが仕方がわからない</li> <li>・自分の想いなど話をする場が持てない</li> <li>・夜間帯に自分を傷つける行動をとる</li> </ul> <p>さまざまな子ども達が、スタッフである専門職や大学生、他の子ども達との対話、交流を通して次のような変化が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不安な気持ちを相手に伝えることができる</li> <li>・自分の好きなこと、趣味や活動の話の相手に伝える</li> <li>・他者と日常のエピソードを共有する</li> </ul> <p>このようにオンライン上に子どもたちが自らの想いを安心して発信できる「居場所」が創られてきたことがうかがえる。</p> <p>これまでの取り組みを通して見えてきた課題としては、この居場所がオンラインであること又、他人から覗かれないようしているため、一つの側面として閉ざされた環境であることから、その場を利用するかどうかを選択するために必要な「体感する」一歩を踏み出すことに、大きなハードルがあることがわかった。現状はスタッフでもある専門職が元々関わっている子ども達に対し参加するための「動機付け」を個別に行い、オンライン寺子屋がどのような場であるかの説明を丁寧に行うことで、初めての場への参加に繋がっている。こうした一人一人の個性に配慮した動機付けを行える窓口として専門職や教職員の協力を増やし、居場所を必要としている子ども達へアクセスしたい。</p> <p>○P R e I S P R e I S活動は月に一回開催しているが、子ども達同士のピアな関係性や大学生・高校生サポーターによる斜めの関係を通して、生活スキルを高める（料理する、手続きをする、公共機関を理解し利用するなど）、自己理解を深めセルフマネジメントする（認知行動療法、S S T、ストレスマネジメントなど）ことを、大きな基軸としグループワークを行っている。対象は大牟田市内の中学生前後としている。</p> <p>昨今の市内の子どもたちの課題として、家庭の環境、地域の環境の変化により出会いや経験の機会が不足することで、レジリエンスの低下につながっている。P R e I Sに参加している子ども達の中には、自尊心が低く他者との交流や社会生活への大きな不安を抱える者も存在するが、グループ内のピアな関係性の中で、自分の想いや不安といった様々な感情を安心して吐露できる空間が作られている。社会的に孤立しやすい環境の家庭もあるが、専門職によるアウトリーチ活動を取り入れることで保護者も含めて細やかにコミュニケーションを図っている。このことにより活動参加の継続性にもプラスの影響が見取れるだけでなく、参加しなくても繋がりは絶やさず関わる続けることが出来る体制が作れている。こうしたピアの空間、専門職によるアウトリーチを通し、子ども達はそれぞれに気づきを得て、可能性を發揮し、それぞれに進路選択や日中の居場所に踏み出すなどのアクションに繋がっている。</p> <p>更に彼らのアクションに対するフォローとして、他機関との連携のためのアウトリーチ活動も必要となったことを挙げる。活動の中で見られた子ども達の変化や身に着けた力がその場だけのものにならないよう、子ども達の理解を得ながら必要に応じて関係機関等との連携を行い、学校や家庭など生活面でも子ども達の力が生かされるように働きかけている。</p> <p>他にも得られた効果として、近隣の市町村への情報発信を通じ高い関心や反応が得られていることが挙げられる。このことは今後の当団体の活動の持続性、発展性に大きく期待が持てると思う。理由としては当団体の且つどいいうは地域や関係機関からのニーズは大きいですが、専門職確保や費用の捻出といった諸課題から、開催頻度が増やせない、活動内容の幅が限定されるなどの課題が出ているため、こうした状況を鑑み情報発信を強化することでさらに多様な人の関わりを広げていく必要性を感じている。</p>
-------------------	---

## III. 今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）※複数設定の場合はコピーし複数記載ください。

①受益者	②課題	③今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）	④指標	⑤目標値・目標状態	⑥結果	⑦考察
子ども・学生	居場所の不足	オンライン寺子屋を平日夜に実施。必要に応じてタブレットを貸与。	70回実施 月、木の19時から20時30分（90分）実施回数や参加者数。	月・木開催で約70回 延べ 150名程度	全64回 月・木（祝日を除く）参加者数 延べ85名	オンライン寺子屋は月・木（祝日除く）でスタッフを確保し定期開催を行えた。参加にはアウトリーチによる「動機付け」と「オンラインの利用方法の説明」が必要であり、コロナ禍中、アプローチが予定通り進められない側面もあった。タブレットはスタッフや参加者への貸与により寺子屋内での学習支援やチャット対応などが実施出来ている。
子ども・学生	その他	困難さを抱えた子どもを対象にP R e I Sを月に1～2回、週末に実施。参加する子どもの状態に合わせて、生活力を高めるためのプログラムを提供。	実施回数や参加者数。実施したプログラム資料。	10回程度 ワークシート等ツールの作成	月に1回 全7回開催（アウトリーチを入れると25回程度）必要テーマに合わせてワークシート作成	月に1回の定期開催を行っている。参加を希望する子どもも増えているが、対応スタッフのマンパワー的課題があり、受け入れ人数を制限する傾向がある。また、コロナ禍で活動内容の工夫が必要となった。参加者に合わせたプログラムを実施し、活動報告等を通して啓発にも務めている。

#### IV. アウトカム（事業実施以降に目標とする状況）\*

事業実施以降に目標とする状況	参加者のニーズが多様化してきたときの対応など、課題となりうる状況も見えてきた。また、必要な子どもたちへアクセスするためには、アウトリーチによる伴走と動機付けの重要性が示唆された。それらのことから、1) 実生活との連携の強化 2) オンライン上でのコミュニケーションの質について検討に引き続き取り組み、他エリアでも活用してもらえるよう発信していきたい。
考察等	<p>①寺子屋について          利用対象者は課題（不登校、ひきこもり、自傷行為 等）を抱えた子どもたちの利用が多い中で、彼らにとっての「安心安全な居場所」をオンライン上に形成するという目標は一定達成したといえる。そのような環境を作るために必要なこととして、「対等な対話関係」が基盤になると考えていたため、参加者がいない時間やその他のミーティングでは、オンライン上が居場所となりうる要素についてスタッフ同士で話をしたり、共に考える時間を積極的に設けたりもした。このように関わる大人たちにとっても対話の場である「寺子屋」を通し、子ども達はその場が実生活での気づきや力になり、行動が変化していったことから、寺子屋の居場所としての価値は実証されたと考えている。オンラインの居場所である寺子屋に繋がる参加者の多くは、教職員や専門職との関わりの中で、一定動機付けされて参加につながっていった。そのことから、教職員に寺子屋の活動価値を広げ、情報を広げる工夫が必要であると考え。また、参加者はおしゃべりがしたい、勉強がしたいなど、利用ニーズが多様化しているため、今後対応の工夫が必要である。</p> <p>②PREISについて          参加者の多くは家庭的な課題も抱えており、自分の意思だけで活動に参加することが出来ないため、アウトリーチを通じて子供だけにとどまらず保護者へのアプローチも必須であった。アウトリーチによって家庭との関係も築かれながら関係機関の協力和協働を基盤とした活動参加を継続することができた。そして、活動を通じて子どもたちのピアな関係性は深まり、自身の想いや環境の困りごとなどの話をするようになった。それぞれの困り感にメンバーが寄り添いながらも、子どもたち同士で困難な場面をクリアするための方法を模索して、言葉のプレゼントを送りあっていた。</p> <p>他にも高校生や大学生との交流を通し、ちょっと先の未来を想像したり見通す機会にもつながった。年上の彼らの経験や想いを聴きながら、自分はどのような進路が選択できるかというイメージが具体的に持つことができた。また、参加者の学年も交ざること、思春期特有のお互いを比較したり、同調したりする傾向は薄くなった。このような関係性が築かれていった結果として、高校進学を決めるなど進路に繋がった、適応指導教室など日中の居場所に繋がったといったケースも生まれた。</p> <p>PREISの活動を通して明らかになった課題として、義務教育卒業後の子どもたちの多くが支援を受けることが難しくなっていくということであった。一例としては高校進学を選ばない、就職先も決まらないとなると、彼らを継続的にサポートする枠組みがあったとしても、自らがその制度的サポートに積極的に働きかけなくてはサポートが受けられないといった具体的な課題がある。こうした子ども達が抱える課題（貧困、若年妊娠、精神疾患、自殺 など）を考えると、継続的に相談できる環境、体制や柔軟に関わることができる伴走者の必要性を強く感じている。現参加者及び卒業した子どもも含め、安心安全な居場所の確保が必要であり、そのための取り組みについて検討したい。また、子ども達が立ち寄りリアルな「場所」の必要性も感じているところである。</p>

#### V. 活動

活動	進捗	概要
専門職の確保	計画通り	ソーシャルワーカー協会やカウンセラー団体との連携により多様な人材を確保
学生サポーターの確保	計画通り	大学教員との連携により福祉系大学に通学する学生の確保
寺子屋利用者と繋がるための連携	ほぼ計画通り	市内のスクールソーシャルワーカーやあまぎやま支援センターとの連携により丁寧な動機付けのもと参加者が繋がっている
ふれいす利用者との繋がり	ほぼ計画通り	大牟田市子ども家庭課やスクールソーシャルワーカーとの連携により、必要な子どもに繋がりグループを構成している
関係機関との連携	計画通り	生活状況に合わせて必要な資源や機関と連携し、既存のサービスや居場所に繋ぐことが出来た
タブレット等の確保	計画通り	当初はタブレットの在庫不足のため確保が困難であったが最終的に確保できた
活動の周知	ほぼ計画通り	コロナ禍で研修の機会が減ってはいるが、大牟田市の教員向け研修や地域、民生委員などの研修で発信できた

#### VI. 想定外のアウトカム、活動、波及効果など

想定外のアウトカム、活動、波及効果など	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動を通して、子どもの第三の居場所について教育委員会等と検討を図る機会が増えた。具体的には①大牟田市における子ども達が抱える課題の整理 ②課題に対する必要な資源や関わりについて ③子どもが安心安全に過ごすことが出来る居場所について、繰り返し検討を重ねる機会を得た。</li> <li>上記の課題感を基に、学校外の第三の居場所も大切であるが、学校が安心安全な居場所になり、子ども達一人ひとりが必要としている支援サービスへのハブ的な役割を果たすことが出来るよう、令和4年の（本事業とは別途の）委託事業について学校環境の変容を試みる。</li> </ul>
---------------------	--

#### VII. 事業終了時の課題を取り巻く環境や対象者の変化と次の活動

課題を取り巻く変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動参加者の多くは、居場所での対話を通し、自身の思いに気づきながら、それぞれが新しい行動に取り組む様子がうかがえる。</li> <li>寺子屋という場所を通し、子ども支援に関わる専門職が機関や立場を超えて繋がることが出来た。この繋がりが日中の支援でも有機的な連携を図ることが出来るようになっている</li> <li>対話について深く検討し実践したことで、OMUTA BRIDGEの他の事業にも相互に影響し、大人に向けた対話の機会など実施することが出来ている</li> <li>寺子屋活動を基軸にした関係機関に対する発信や連携を通して、これまでの制度サービスでは手が届かなかった課題が明らかになってきた。それらの課題に対する具体的な取り組みが必要であることを共有できたので、次年度以降アクションに移す計画である。</li> </ul>
-----------	---

#### VIII. 他団体との連携

連携先	実施内容・結果
大牟田市子ども家庭課	要対協児童の状況や情報共有、協働による家庭支援
大牟田市社会福祉協議会	保護者支援、食料支援
あまぎやま子ども家庭支援センター	日中の相談支援との連携・協働
大牟田市教育委員会・教育相談室	情報共有、学校との連携、スクールソーシャルワーカーとの連携
坂西医院	利用者の紹介、情報共有

#### IX. インプット ※事業完了月の月次収支管理簿の金額を入力ください。（精算金額と一致させる必要はありません）

		計画額	実績額	執行率
事業費	直接事業費	4,122,650	3,971,344	96.3%
	管理的経費	580,000	580,317	100.1%
合計		4,702,650	4,551,661	96.8%
補足説明				

X. 広報実績

広報内容	内容
1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）	活動報告を団体ホームページに掲載（P R e I S） 社会福祉学会 大会報告誌
2.広報制作物等 当該事業費を使って制作したもの	研修用レジュメ 教員用チラシ
3.広報制作物、購入物等でシンボルマークの活用方法（事例）	団体ホームページへの掲載 研修実施時のレジュメに掲載
4.報告書等	団体の報告書

XI. ガバナンス・コンプライアンス実績

①規程類※の整備実績 ※規程類：定款・規程及び準ずる文書類(指針・ガイドライン等を含む)	状況	内容
1.事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。	完了	
2.上記設問1で「整備中」の場合は、事業開始時と比較して、整備状況がどのように改善されたかを記載してください。		
3.整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。	一部未公開	ホームページ運営会社に掲載作業を依頼中。年度内に掲載予定。
4.変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。	変更はなかった	
②ガバナンス・コンプライアンス体制	状況	内容
1.社員総会、評議員会、理事会は、規程類の定める通りに開催されていますか。	はい	
2.利益相反防止のための自己申告を定期的に行っていますか。	はい	
3.関連する規程類や資金提供契約の定めどおり情報公開を行っていますか。	はい	
4.コンプライアンス委員会またはコンプライアンス責任者を設置しましたか。	はい	
5.ガバナンス・コンプライアンスの整備や強化施策を検討・実施しましたか。	はい	
6.報告年度の会計監査はどのように実施しましたか。 (実施予定の場合含む) (複数選択可)	<input type="checkbox"/> 外部監査	
	<input checked="" type="checkbox"/> 内部監査	
	<input type="checkbox"/> 実施予定はない	
7.本事業に対して、国や地方公共団体からの補助金・助成金等を申請、または受領していますか。	いいえ	
8.内部通報制度は整備されていますか。	いいえ	